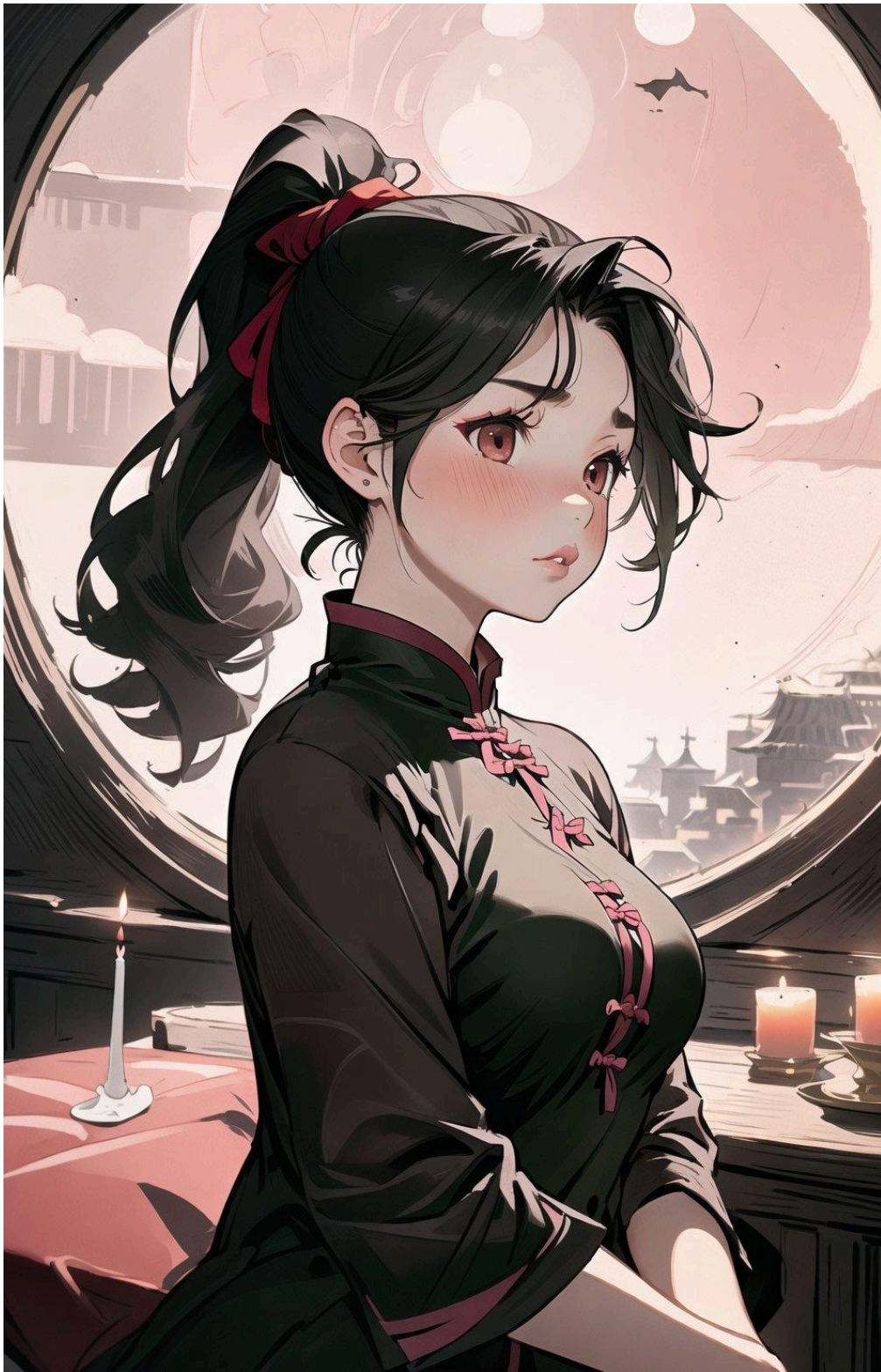


それから半年して彼はまたこの湖畔の施設にやってきた。彼の容態はとても悪くなっていた。心臓の手術をしたのだが結果は良くなかったらしい。

「私を抱いてください」と私は恥をかなぐり捨てて自分から彼に頼んでみた。私にできることは“そのこと”だけだったから。手遅れにならない前に彼に私を“味わって”欲しかった。「……君は一体どういうわけでここにいるんだい」と彼は真剣な口調で言った。「私は売られた人間です。前の主人に捨てられそうになったときに、王さんに拾ってもらったのです」と私は小声で説明した。



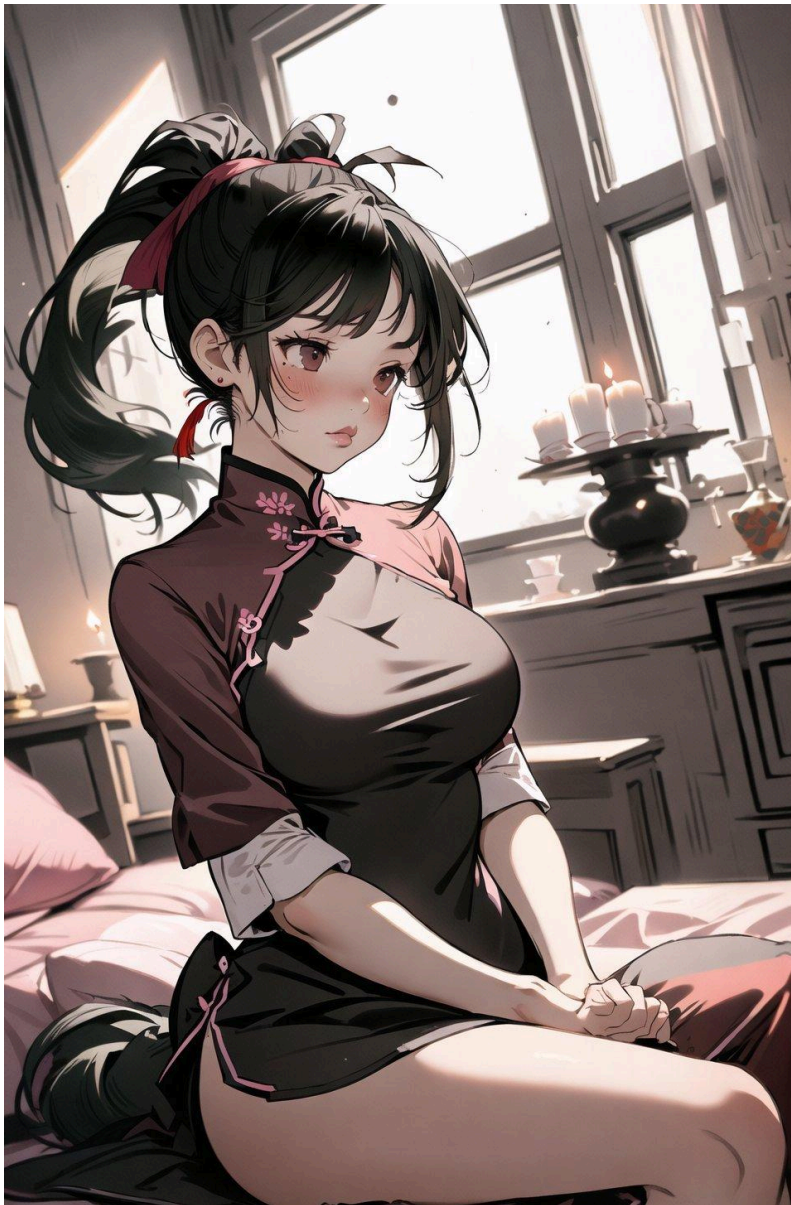
「君を自由にしてあげることには出来ないの？」  
と彼は私の肩を抱いていった。その腕はぞっ

とするほど細くて、そこにある微弱な生命力は、滅びゆく雰囲気醸しだしている。

「多分解放されて故郷にもどっても、父親はまた見込みのない商売をして失敗するか、博打を始めて私を売ります。私には帰る場所はどこしかないんです」

「なんのために君の人生はあるんだい。ひどすぎるじゃないか」と彼は幽霊みたいな暗い顔で言う。

「そんなことはどうでもいいの。私を抱きたいですか？」と私は彼の言葉をさえぎって言った。



「抱きたいさ。前会った時も既にそう思ってた.....でもそれをやったら、僕は他の男と同じにレベルに落ちてしまう」

「そんなことはないです。楊さんは特別です。あなたの絵のモデルをしている時はとても楽しかった。あの絵は今も大事にもっているよ」

と私は珍しく言いたいことを言えた自分に驚く。

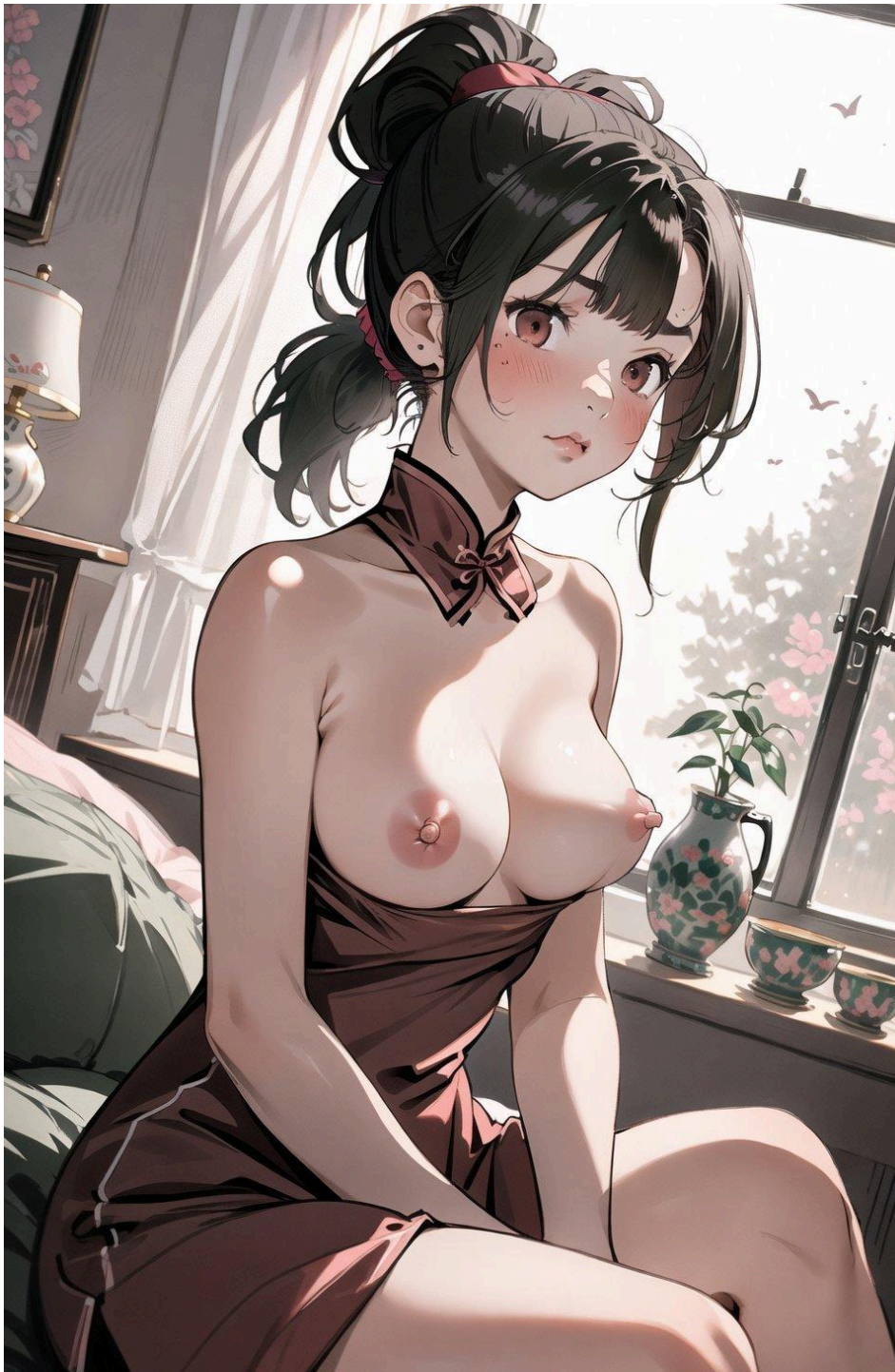
「有難う。僕にとってもあの時の思い出はとても大切だ。出来たら君と、病気のことも君の家の借金も関係のない世界で会いたかった」

彼は悲しそうに笑ってそれから私にキスした。とてもロマンチックな気分に含まれる。彼は私の髪を父親が愛娘にするように優しくなでながら、キスを続けた。それから急に真顔になって

「実は恥ずかしいんだけど僕は女性と“あれ”したことがないんだ」と真っ赤になって彼は告白した。

「……そうなんですか。じゃあ私に任せてください」なんだか彼のことがとても可愛く思えた。そして無性になにか悲しかった。

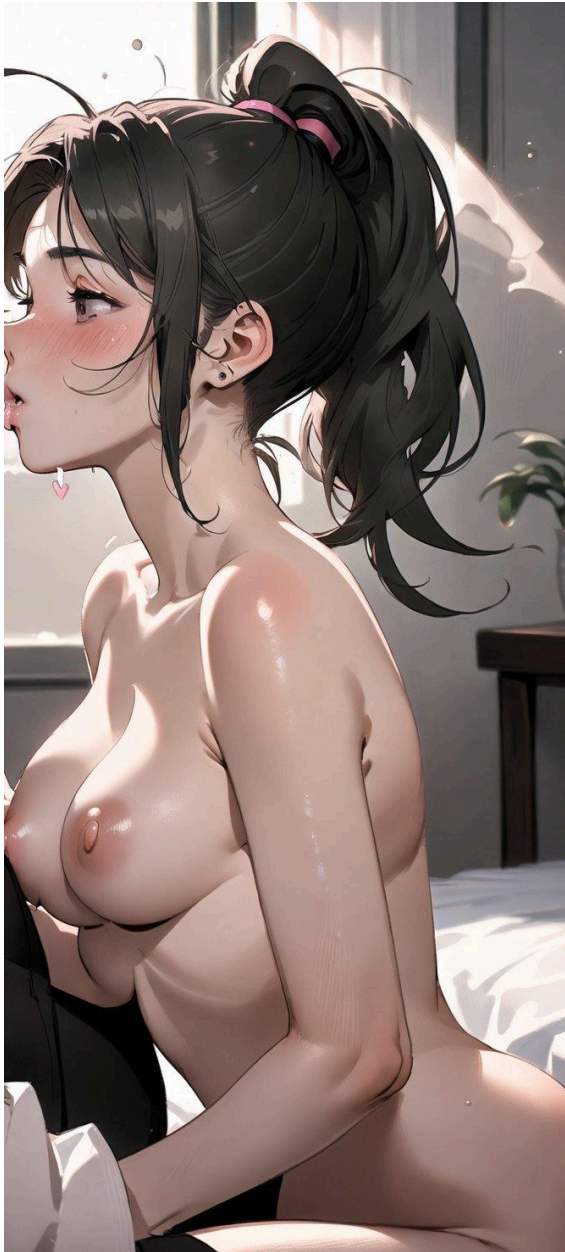
「おまかせするよ」と彼は照れたように笑った。私は無言で自分の洋服のボタンを外していった。私は自分が"リードする"経験がなかったもので、それはぎこちない始まりだった。二人でベッドに入り、私は彼の手を私の乳房の上に置いた。



「どうすればいいの」彼は真っ赤な顔で私を見ていた。弟に“お絵かきを教える姉”みたいな不思議な感じ。



「優しく触って。なぜたりして」と私は彼の髪を撫でながら言った。彼は慣れない手つきで、私の胸を最初は触っていたが、やがて雄の本能に目覚めたのか夢中で揉みはじめた。乳首に指が当たると身体に強い電流が走ったみたいになる。感じ方がいつもよりすごかった。私は彼の細い身体を抱きしめて、唇で彼の色素の薄い乳首をやさしく舐めた。



そしてまた何回かキスをした後で、私が下になり彼は挿入を試みた。初めてなので中々入らなかったが、私が手で誘導してあげることで、彼は私の中に入ることができた。「あ、ありがとう、気持ちいいよ」と彼は青白い顔を少しほてらせて、ため息まじりで言った。

「うん、私こそ、きもちいい」と私も吐息をもらしながら応える。すると彼は何か誇らしげな顔で私の額にキスした。キスされた部分は、ほの暖かく感じられ、何か崇高なものから祝福されている気がした。

私は初めて、本当に生まれて初めてセックスが気持ちいいものだと感じた。私たちはお互いの顔中にキスをしたり、手で頬をなでたり、鼻を触ったり、へそをくすぐったりした。